

地域資源の可能性を見出す企画デザインの研究

～神戸ルミナリエのコンセプトワークから立案・実施まで～

STUDY OF A PLAN DESIGN FINDING THE POSSIBILITY OF LOCAL RESOURCES - From Concept Work Of Kobe Luminarie To Drafting, Enforcement -

かわいひろゆき デザイン学部ビジュアルデザイン学科 教授
相良 二郎 デザイン学部プロダクトデザイン学科 教授
相澤 孝司 デザイン学部プロダクトデザイン学科 教授
岡村 光浩 デザイン教育研究センター 准教授

Hiroyuki KAWAI Department of Visual Design, School of Design, Professor
Jiro SAGARA Department of Product Design, School of Design, Professor
Takashi AIZAWA Department of Product Design, School of Design, Professor
Mitsuhiro OKAMURA Center for Design Studies, Associate Professor

要旨

本研究は、阪神・淡路大震災の復興の過程で得た学びを地域社会に蓄積された資源・財産と捉え、その活用について具体的な「企画」をデザイン（プランニング）し、実施・検証（プロデュース）することを目標とする。

企画のテーマは、当初、「震災復興と神戸ルミナリエ」を想定していたが、3.11を受け、神戸ルミナリエ組織委員会の要望もあり、「被災地神戸からの東日本大震災の被災地支援」と修正された。このことにより、企画の方向性がより社会性のあるものになった。

具体的には、以下の5つの企画を立案し実施した。

1. ひまわりんくマップ制作
2. 風のひまわりんくデー実施
3. ひまわりんく体操考案
4. 地球民会議の開催
5. 「神戸ルミナリエ」「1.17のつどい」でのイベント企画・実施

Summary

This research realizes what was obtained in process of revival of the Great Hanshin-Awaji Earthquake to be the resources and property accumulated in the community, designs a "plan" concrete about the practical use (planning), and aims at carrying out and verifying (producing).

Although the theme of the plan assumed "earthquake disaster revival and Kobe Luminarie" at the beginning, it receives 3.11, also has the Kobe Luminarie organizing committee's request, and was corrected with "stricken area support of the Great East Japan Earthquake from stricken area Kobe."

By this, the directivity of the plan became that more nearly social.

Specifically, the following five plans were drawn up and carried out.

1. Himawalink Map Work
2. Himawalink Day Enforcement of Wind
3. Himawalink Gymnastics Design
4. Holding of Earth People Meeting
5. Event Plan and Implementation by "Kobe Luminarie" and "Meeting of 1.17"

1) 研究の目的

阪神・淡路大震災から17年目を迎え、震災の記憶は薄れつつあるが、復興過程で学んだ「命の尊さ」や「絆の大切さ」は、広く人間関係や地域社会を形成する上で欠かせないものとして、昨今、ますます重要視されている。

本研究は、その学びを、被災地神戸の貴重な財産=地域資源であると位置づけ、震災復興のメモリアルイベントとして毎年催されてきた「神戸ルミナリエ」の会場で、次世代に伝えるための企画を立案・実施することを目的とする。

2) 概要

本研究は、前年度におこなわれた「都市型災害復興イベント『神戸ルミナリエ』の多角的検証と新しい企画提案の研究」の成果を受けて進められた。

研究を始める直前の2011年3月11日に発生した東日本大震災は、図らずも「命の尊さ」や「絆の大切さ」を日本中の多くの人々に再認識させた。思いやりや助け合いの精神が発揮され、ボランティアが全国から被災地に駆けつけた。

しかし、5月の連休をピークにボランティアの人数は減りだし、8月には早くも、「忘れられることが一番つらい」という被災者の声が聞こえ始めた。

そんな折、神戸ルミナリエ組織委員会から私たちに、東日本の被災地に対して神戸からメッセージを送る企画をという要望が寄せられた。

神戸ルミナリエで「命の尊さ」や「絆の大切さ」、そして他人を思いやり助け合うというテーマをいかにアピールするか、また、「みんなが、毎日、10年つづけられる支援」の提案をどう企画するかを模索しながら、本プロジェクトが進められた。

プロジェクトのスローガンは、「1.17 から 3.11 へ。想いよりそう」と決定。昨年同様、できるだけ多くの人々が能動的に参加できることをコンセプトに、以下のような参加型の企画が考案された。

1. ひまわりんくマップ制作
2. 風のひまわりんくデー実施
3. ひまわりんく体操の考案
4. 地球民会議の開催

5. 「神戸ルミナリエ」と「1.17 のつどい」でのイベントの企画立案と実施

- A) 「想いよりそう」メッセージ缶バッジ
- B) 3.11 へ「想いのライン」
- C) 想いを奏でる「追悼コンサート」
- D) 想いをつなぐ「名もない絆」

3) ひまわりんくマップ制作

昨年につづき、学内で「はるかのひまわり」を栽培した。また、昨年収穫した種を、栽培を希望する40余りの小中学校、団体、個人に郵送し、栽培地点をグーグルマップ上にマッピングした（希望箇所のみ。マップは、文末のサイトアドレスで確認可能）。東日本の被災地では、いわき市、仙台市、南三陸町、つくば市などにも種を送った。

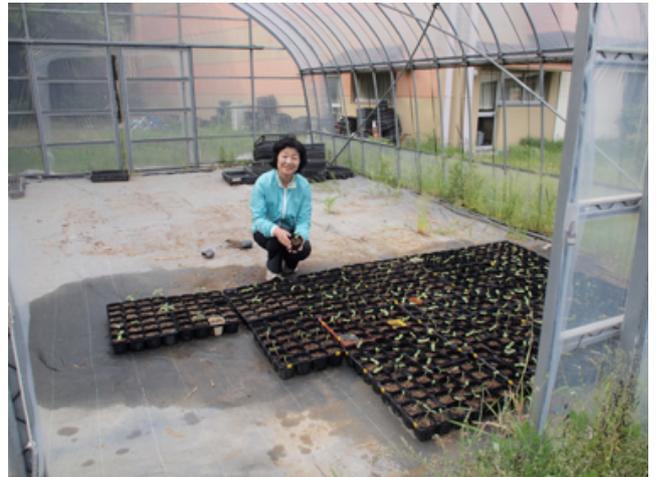


図1) 淡路の岩屋中学校には、発芽状態のひまわりを届けた

4) 風のひまわりんくデー

8月7日（日）、本学から送られた種で「はるかのひまわり」を育てた人々による親睦会が本学で催された。

加古川の中部中学校の生徒たち、看護大学の学生たち、個人で栽培した人々など約50人が集まり、震災の情報を共有したほか、「ひまわりんく体操（後述）」や、震災の歌「しあわせ運べるように」の合唱など、有意義なひとときを過ごすことができた。

5) ひまわりんく体操

窮屈な避難所生活を余儀なくされている被災者の健康

管理を目的に、「ひまわりんく体操」を考案した。

インド哲学の5大元素である地・水・火・風・空の順番に、大地に眠るひまわりの種が水の力で芽を出し、火（陽）の力で成長。風に花びらをそよがせ新たな種をつくり、空（宇宙）の連鎖で命がつづいていくというストーリーを創作。ヨガのポーズを元に、動きをつけた。

誰でもどこでも手軽にできるうえ、肉体はもとより、軽度のうつ状態にも効果が望める体操となった。

この体操は「神戸から元気を（10月16日 神戸震災復興記念公園）」ほか、4つのイベントで公開された。



図2) ひまわりんくデーで、全員で被災地へメッセージを書く



図3) ひまわりんくデーで「ひまわりんく体操」を初披露

6) 地球民会議

3.11を機に、「絆」という心のレベルでも、また、エネルギー問題をはじめとする物質的なレベルにおいても、私たちは今までと違う新しい生き方を模索しなければならないという思いから、未来（の価値観）を考えるプラットフォームとして「地球民会議」を実施。

9月28日（水）に第1回目の全体会議を立ち上げ、10月29日（土）は第2回目、シュタイナー思想を研究している小林直樹氏による講演「これからの時代をどう生きるか—シュタイナー人智学の観点からの考察」を開催。第3回目は、「抱っこ法」という癒し理論について全国で講演とワークショップをおこなう、下和田実氏のワークショップを11月22日（火）におこなった。



図4) 第2回地球民会議で講演する小林氏と参加者

7) 「神戸ルミナリエ」と「1.17のつどい」

「神戸ルミナリエ」（12月1日～13日開催）と「1.17のつどい」（1月17日開催）の会場で、神戸から被災地に向けて、4つの企画を実施した。

A) 「思いよりそう」メッセージ缶バッジ

神戸の子どもたちの絵を印刷した円形の台紙を24種類用意。来場者に、被災地への応援メッセージを書いてもらい、その場で缶バッジを制作、展示した。

B) 3.11「想いのライン」

被災地に鎮魂と祈りの気持ちを届けるため、東日本の方角を示すシルバーのラインを制作。神戸ルミナリエの会場と震災復興記念公園の2カ所に設置した。

C) 想いを奏でる「追悼コンサート」

阪神・淡路大震災を経験した若手音楽家による、20～30分の日替わりコンサートを企画・実施した。

D) 想いをつなぐ「名もない絆」

作詞家、尾飛良幸氏が制作した「名もない絆」を、本プロジェクト（通称：ヒトキズナぷろじえくと）のテーマソングとして起用。神戸ルミナリエの期間中、19時から20時まで、BGMとして会場に流した。



図5) 連日、たくさんの人が被災地へのメッセージを書いた



図8) 「想い」の詰まった缶バッジは、被災地に届けられた



図6) 神戸震災復興記念公園に設置された「想いのライン」



図7) 震災を体験した若手音楽家による「追悼コンサート」

8) まとめ

缶バッジは2～3月（年度をまたいで6月までの5ヶ月間）で、石巻市の湊小学校、湊第二小学校、渡波小学校、開北小学校、雄勝中学校、桃生中学校、北上中学校と、渡波第一仮設住宅ほか7つの仮設住宅、そして、真壁病院

（東松島）、バンビ保育園（東松島）、気仙大工左官伝承館（陸前高田）と4つのイベント会場で配布された。

また、神戸市立福田中学校と東京都練馬区防災課の要望により、個々におこなった缶バッジプロジェクトにノウハウを提供することで、連携の輪を広げることができた。

本研究の当初の計画は、17年前の阪神・淡路大震災から学んだ「命の尊さ」「絆の大切さ」という教訓を次世代に伝えるために、神戸ルミナリエのコンセプトを再検討し、有効な企画を立案・実施するというものであったが、東日本大震災を研究範囲に含めたことにより、「教訓」は日本社会全体の共通テーマとなり、より大きなスケールの企画を立案・実施し、メッセージを発信することができた。

本研究は、様々なレベルで成果を残すことができたが、現代人にもっとも必要とされる「癒し」について、さらに、それを発展させた生きる指針としての新しい「幸福観」について、いくつかの提言ができたものと確信している。

本研究の成果は、以下のサイトに詳細が報告されている。

<http://visual.kobe-du.ac.jp/himawalink/>

※表紙に記載できなかった共同研究員

佐野浩三	プロダクトデザイン学科	教授
曾和具之	プロダクトデザイン学科	准教授
瀬能 徹	ファッションデザイン学科	准教授
金子照之	ビジュアルデザイン学科	准教授
久本直子	ビジュアルデザイン学科	助教